

石器時代の刺突具

しとつぐ つ さ こうききゅうせつきじだい
刺突具とは文字通り突き刺す道具です。わが国では約4万年前の後期旧石器時代の初頭

がたせつき きげん
に出現したナイフ形石器の一部にその起源が求められます。

しゅりょうぐ やりさきがたせんとう
刺突具は一般に狩猟具として使われたもので、ナイフ形石器の一部のほか、槍先形尖頭

き いしもり ゆうぜつせんとうき せきぞく ろっかくせいもり こっかくき
器・石銛・有舌尖頭器・石鏃などの石器、鹿角製銛やヤスなどの骨角器、また先端を鋭

もくそう
く尖らせた木槍などが主要なものです。

しょくりょうかくとく
ここでは、食料獲得の道具として大きな役割を果たした、後期旧石器時代から縄文時

せきせい
代までの石製刺突具の変化を、年代順に展示しています。

旧石器時代の刺突具

【ナイフ形石器】

4万年前から1万4千年くらい前までに使われた、日本の後期旧石器時代を代表する石器の一つです。長い棒の先端に装着して槍に、また短い柄を付けてナイフのように使うなど、まさに当時の万能具でした。

【槍先形尖頭器】

ナイフ形石器が小型化する2万年前の頃、木の葉形をした槍先として出現します。これらは表裏面の加工が全体におよび、左右対称の見事な形に仕上げられています。ナイフ形石器には見られないこの加工方法の変化は、石器製作上大きな技術革新と言えるでしょう。

【細石器】

旧石器時代の終わりの頃、日本を含むアジアの東北部では、長さ3cmほどの薄く細長いカミソリ状の石器がよく作られました。これは細石刃と呼ばれ、先の尖った木や骨の軸に埋め込んで槍やナイフとして使いました。



きゅう せつ き じ だい し とつ ぐ
旧石器時代の刺突具

縄文時代の刺突具

【大型尖頭器】

旧石器時代の終わり頃から縄文時代の初めにかけて、槍先形尖頭器が大型化し、中には20cmを超えるものも作られます。槍とは異なる使用方法や、威信財として製作されたことも考えられるでしょう。

【有舌尖頭器】

旧石器時代の人々は、ナウマン象・ヤベオオツノジカ・ステップバイソン（野牛）などを狩りの対象としていましたが、これらの大形獣は温暖化による自然環境の変化、あるいは人々によるオーバーキル（殺し過ぎ）の結果、旧石器時代の終わり頃に相次いで絶滅してしまいました。

これらに代わって繁殖した嗅覚が鋭く、俊敏なニホンジカやイノシシなどの中形獣を捕獲するため、縄文人たちはこれまでの手持ちの槍から有舌尖頭器を装着した投槍器に変化したと考えられています。

【石 鏃】

旧石器時代から縄文時代の石器群へ移行する中で、最も大きな変化は弓矢の発明です。機能的に優れた弓矢の普及は、ニホンジカやイノシシのほか、タヌキやウサギなどの小動物も狩猟の対象としました。その結果、投槍器による狩猟はほぼ消滅することとなります。

